

民家保存に関する一考察：第一報
～民家居住者の各世代の意識傾向～
甲子園短期大学（非） 瀬部 明

【目的】全国各地で歴史的民家や町並み保存への取り組みが展開されているが、保存対象民家の居住者がそのことにどんな意識を持ち、民家をどのように評価しているかによって、保存のあり方が大きく変化すると考えられる。本研究では過去に行われた民家調査時のアンケート調査のデータを再検討し、民家居住者各世代ごとの住まいの満足度と民家に対する意識を整理した上で、民家保存の主体者の意識傾向と保存のあり方を展望する。

【方法】調査実施期間は平成6年9月～12月、調査対象民家は大阪府寝屋川市内12軒、枚方市内1軒で、間取り採取と居住者の意識調査等を行った。なお、寝屋川市内分については、市史編纂作業の一環として行ったものである。

【結果】（調査対象民家の概要）築年は明治初期前後と考えられるものが大半で、入母屋造3軒、大和棟2軒、切妻8軒である。居住形態は10軒が3世代同居であるが、第2・3世代は主に別棟等で生活している。（住まいの満足度）各質問項目中、家の維持管理については全般的に満足度が低く、特に実際に民家で居住している第1世代の評価が低くなっている。（民家に対する意識）全般的には各世代とも同じ評価傾向を示しているが、各家ごとにみれば世代間の評価はあまり一致していない。また、第2・3世代の評価は第1世代に比べてより肯定的である。（まとめ）第2・3世代の民家継承意欲が高かったが、その評価には住み手としての居住性よりも傍観者としてのイメージで判断していることがうかがえる。次代を担う彼らが、都市化の中でこれらの民家を相続等によって継承する際に、実際の「生活の場」としてどのような判断や対応を示すのか注目したい。